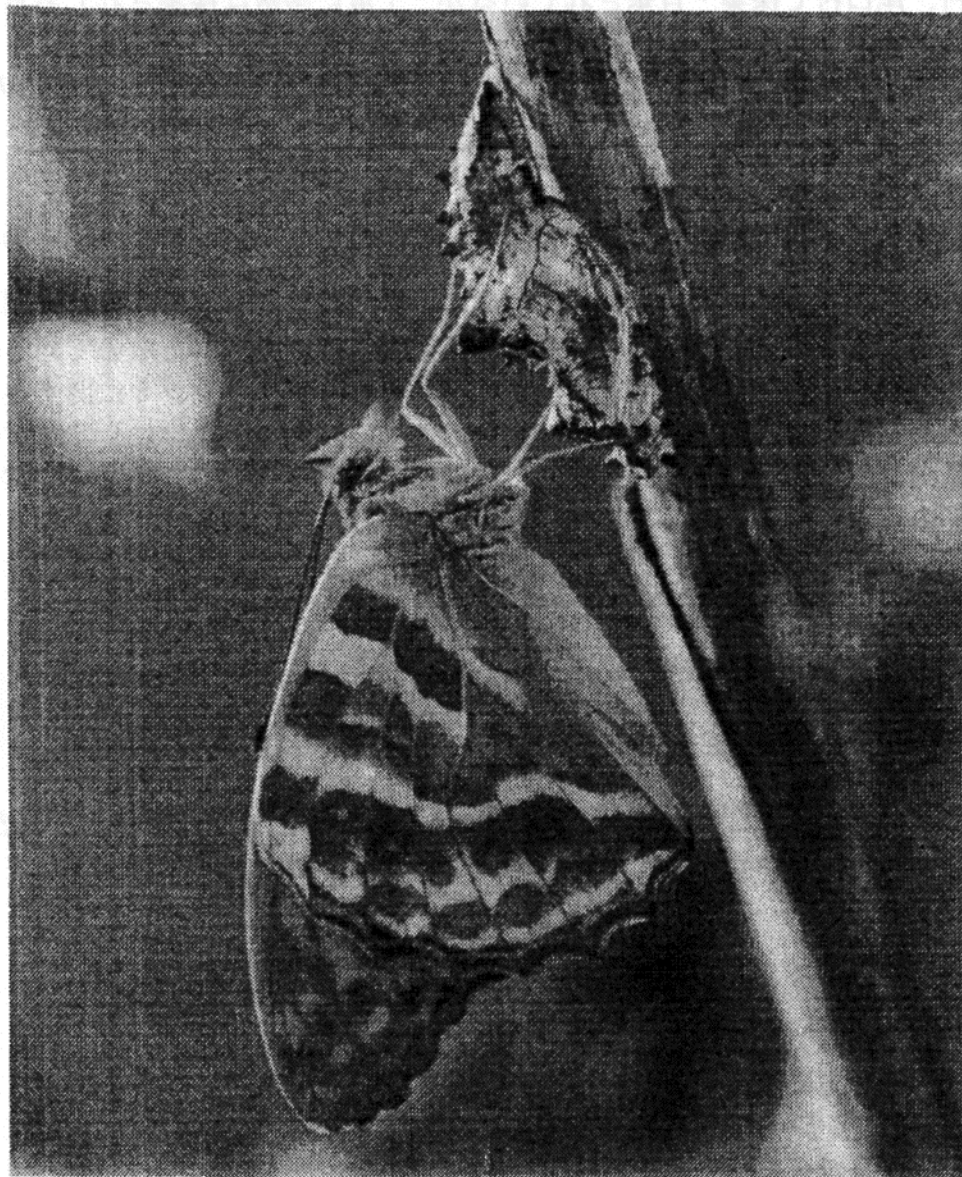


# 翔

NO.74

'88 DECEMBER



Butterfly

Beetle

Insect

百万石蝶談会

## 噴泉塔(白山麓・岩間温泉)でヒメシジミ6頭を目撃確認

指田春喜

松井正人氏により「石川県の珍蝶」(翔 NO.70 Jun.1988)が報じられた。氏はこの中で、ヒメシジミ *Plebejus argus micrargus* Butlerにつき、県内の過去のデータを整理されている。それによると本種は、いずれも白山麓の吉野谷村、白峰村、尾口村で採集・目撃されているが、1度に多数は採集されておらず、これまでの採集総数は6頭に過ぎない。

筆者は、1984年岩間温泉・噴泉塔でヒメシジミ6頭を目撃確認しているので、報告しておく。

## &lt;データ&gt;

1984年7月21日 石川県尾口村岩間温泉噴泉塔 4♂♂2♀♀ 指田春喜

当日は石川県産のアサマシジミを求めて、岩間温泉より噴泉塔までの間を往復したが、ヒメシジミ6exはいずれも噴泉塔付近で見られたものである。この時点では、ヒメシジミに関する情報はもちろん、アサマシジミに関するものもほとんど無く、当地へは偶然入ったものである。また、浅学にして筆者は、石川県内においては珍稀種に属することを知らなかったのも、目撃時においては特別の思いも無かった。そこで、目撃時の詳しい状況などは、今となっては鮮明でない。事態が正確に把握できていれば、食草などを含めた生態的なことについても、情報が得られたかも知れず、誠に残念である。

## 蛇谷でヒメシジミの幼虫を採集

勝海雅夫

石川県のヒメシジミはアサマシジミとは違い、非常に珍しいとされている。<sup>1)</sup> 筆者は1983年に思いがけなくも蛇谷で、2齢幼虫1exをハギより採集しているので報告する。

1983年5月23日 石川県吉野谷村蛇谷 1幼(2齢) 勝海雅夫

当時は白山のアサマシジミを狙っていた頃で、嵯峨井淳郎、野中 勝、吉村久貴の大先輩方に連れられて行った事を覚えている。採集時は事の重大さを知らず、アサマシジミの採幼に夢中で、ヒメシジミが格段に珍しいと知ったときには、後の祭だった。

この唯一のヒメシジミも蛹を腐らせてしまい、羽化には至らなかったが、ヒメシジミの幼虫であったことは間違いない。

## 参考文献

<sup>1)</sup> 松井正人(1988) 翔(70) 石川県の珍蝶

## 赤兎山でゴマシジミを採集

松井 正 人

白山三ノ峰より西方へ伸びる稜線は、石川県と福井県の県境をなし、その中に標高1628mの赤兎山がある。

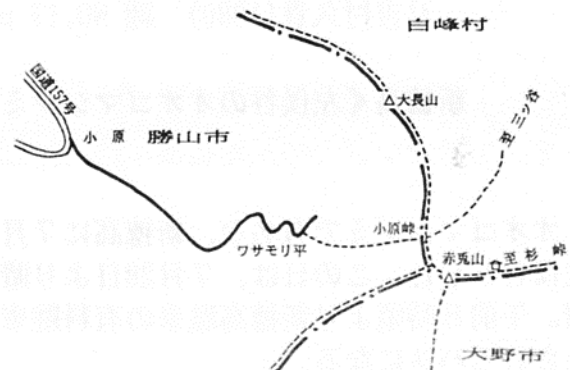
白山から三ノ峰、もしくは白峰村三ツ谷から杉峠を經由して登ることもできるが一般的ではなく、勝山市小原から林道をワサモリ平まで入り、小原峠を経てピークに至るのが登り易い。ワサモリ平登山口と小原峠には道標がありコースタイムが記されている。しかし全くあてにならず(デタラメ)、登山口より大長山との分岐点の小原峠までは約30分、ここよりピークまでも約30分と、1時間程度でピークに立つことができる。ピークからは、地塘を配した高原の中を行く1本の道と、その向こうに避難小屋がポツンと見える。県内に徒歩1時間で行ける、こんな素晴らしい場所があるとは知らなかった。

ところが、国土地理院発行の地形図(越前勝山)に記されているピーク南側の岩場が、どれだけ探しても見つからない。辺りはなだらかな草原と、それにつながる雑木林。ピークと避難小屋を何度往復しても、岩場は無い。大長山を見遣れば、山肌に岩場が目立つ。小原峠へ戻り、大長へ登りなおすことも考えたが、時間的、体力的に余裕は無く、比較的なだらかな杉峠へ向かって調査することにした。

避難小屋を過ぎた辺りで台地状の草原の縁に立つことができる。白峰側の山肌を眺めていると、斜面の下の方で何かが追飛している。双眼鏡で見ると、まぎれもなくゴマシジミ。灌木につながって斜面をずり落ちる。灌木が結構深い。ガサガサやってるまにゴマを見失ってしまう。元いた所まで這い上がり待つ事1時間。ついに1頭をネット・イン。この間、何度か斜面をずり落ちたり這い上がったり。

ゴマシジミ 1988年8月6日 白峰村赤兎山 1頭採集1頭目撃 松井正人

今回は赤兎山でゴマの調査を行なったが、環境は前述の大長山の方が良いと地形図からも読み取れる。なのになぜと思われるかも知れないが、赤兎は徒歩1時間、大長は3時間となれば短い方に足が向いてしまう。ゴマシジミの分布は広いと思われるが、それを確認するのは虫屋。短いシーズン中に数日しか調査できないとしたら、6時間歩いて確率6割をとるか、2時間歩いて2割をとるか。僕はいつもこの問題に悩まされている。



## 白山市の瀬のシモツケにホシミスジが発生

野中 勝

「市の瀬の燈火」といえば、蛾をやっている人にはそれ以上何の説明も必要とせず、1本の水銀灯を意味する。この水銀灯は白山市の瀬のバス停わきにある建物に近接して存在し、その立地条件の良さから夜間には多数の虫を集め、建物の壁が虫に静止場所を提供することもある。絶好の夜間採集見回りポイントとなっている。初めてムラサキシタバを手にして、この水銀灯の下で狂気した人は大勢いるし、カミキリでは金子二久氏によってヨコヤマヒゲナガカミキリが採集されている。

今から5～6年前、川沿いにキャンプ場が作られた際、水銀灯の所からキャンプ場下っていく階段も整備された。その時に階段の両側、水銀灯の直下にシモツケが植えられた様に記憶している。1988年9月4日午前11時頃、前夜からの居残りの蛾を求めて、ここを訪れていた筆者は、1頭のホシミスジがそのシモツケに産卵しているのに気がついた。根際の低い枝先を選んで葉上に静止し、腹部を折り曲げて葉裏に産卵していた。何回か産卵行動を観察した後、中西重雄、勝海雅夫両氏の協力を得て、卵2、1齢幼虫6、2齢幼虫3を採集した。幼虫の多くは巣を作り、その中に静止していた。石川県の本種の産地としては、尾添川三又発電所付近の崖が有名であるが<sup>1)</sup>、白峰村の三ツ谷、湯の谷でも記録されており<sup>2)</sup>、市の瀬のシモツケも付近で発生・飛来した個体によって利用されたものと思われる。ただし、幼虫又は卵がシモツケと共に移入された可能性も否定できず、今後シモツケの出所の調査が必要である。最後に御協力頂いた中西、勝海両氏にお礼申し上げる。

1988年9月4日 石川郡白峰村市の瀬 野中 勝・中西重雄・勝海雅夫  
 ホシミスジ 卵 2 exs  
 1 齢 6 exs  
 2 齢 3 exs

参考文献 <sup>1)</sup> 諸道秀人(1980) 翔 NO.17 p5~6

<sup>2)</sup> 吉村久貴(1980) 翔 NO.17 p6

## 新穂高《左俣谷のオオゴマシジミ》

勝海雅夫

オオゴマシジミで有名な、新穂高に7月31日入谷する。今回のターゲットは左俣谷とした。この日は、7月28日より晴れの日が続いており、特に今日は快晴。午前8時頃より新穂高温泉の有料駐車場が満車となり、貴重な1時間を待たされるハメになる。

今回、わさび平より上方と下方の2ポイントに分けて捜す事にした。わさび平より下方ポイントは、大抵の採集者が入谷しているポイントで、小さな谷に食草が自生しており、その谷から飛んでくるというポイントである。午前10時過ぎには、4～5人の採集者が入り、どの採集者も4～5頭とあまり採集していない。昨夏は40～50頭採れているので、今夏は発生初期なのか、または2～3年豊作、1～2年凶作といった発生のリズムがあり、今年はその谷間なのだろうか？ 30分程採集したが、1♂のみとふるわないので、上方のポイントに向かう。

わさび平より1km弱程の所に小さな浅い谷があり、ここでまず2♂♂、帰りに1♀、更に奥のコンクリート橋の左手ブッシュ上で12exsを採集。昼からでも林縁を上下に青く輝やきながら飛ぶ様子は、印象深い。帰り際、訪花しているもの3頭を追加し、19exsで帰宅した。時間的に、もう1～2時間粘れば、20～25頭程採れると思われる。ちなみに新穂高温泉着は、午後4時半であった。

1988年7月31日 岐阜県上宝村新穂高温泉 19exs 勝海雅夫

## タテハモドキ雑記

吉岡 泉

筆者は、1988年8月25日～28日の4日間、妻の実家である宮崎県日南市へ行く機会を得、近所の草地にてタテハモドキを数頭採集したので報告しておく。

タテハモドキは、九州南部の宮崎市以南もに土着する南方系の蝶である。特に宮崎県では、海岸地帯の水田や荒地に多く、時には1カ所に群棲していることもある。

今回採集した場所は、民家の裏に広がる畑の中にあり、ススキ・ヤブガラシ・カナムグラなどが密生しているほんのわずかな草地であった。朝夕散歩がてらの採集であったが、特に夕方近くになると占有行動を採る(たぶんオスと思われる)個体が多く、1頭採るとまた別の個体が飛んでくるといったように、次から次へと採集できた。

尚、ヒョウモン類も結構多く、ツマグロヒョウモンなども楽しめる。

### <採集データ>

#### ■タテハモドキ

1988年8月25日	宮崎県日南市平野	5exs	吉岡 泉
" 8月26日	"	5exs	"
" 8月27日	"	3exs	"

#### ■ツマグロヒョウモン

1988年8月27日	宮崎県日南市平野	1♂	吉岡 泉
------------	----------	----	------

#### ■ナガサキアゲハ

1988年8月28日	宮崎県日南市平野	1♂	吉岡 泉
------------	----------	----	------

## カナディアン・ロッキー その1

野 中 勝

昨年「月刊むし」9月号に載ったカナダ・ピンクマウンテンのウスバキチョウ採集記は十分に刺激的であった。従って留学先のボスから、予定では今年3月までだった期間を延長したらどうかという話があった時には、即座にOKし、夏まで延ばしてカナダに寄って帰ろうと決心した。2年間の米国留学中に、アパラチアン山脈、フロリダ等も旅行したが、何といても一番印象深かったのは、昨夏のコロラド・ワイオミングのロッキー山脈であった。虫採りを主目的とする僕は勿論のこと、雄大な自然、美しい草花、そこそこに顔を出す野生動物等は、家族も多いに楽しめる様子だった。更にスケールが大きいといわれるカナディアン・ロッキー。そこに乱舞するはずのウスバキチョウ。この旅も素晴らしいものになるはずだ。

昨年のロッキー旅行は、あまりにも予備知識が乏しかった。事前に入手した情報は「*Butterflies of The Rocky Mountain States*」という本ぐらいで、この本から、例えば採集したかった *Parnassius clodius* について分かった事といえば、「6・7月に発生、コロラドには産せず、ワイオミングは西部に分布する。」といった程度。調べてみれば石川県南部に分布するという情報だけで、アサマシジミを見つけろと言うのと似たようなもので、簡単でない事は容易に分かって頂けると思う。更に悪いことには、ワイオミングは石川県の約80倍、日本の約3分の2の面積を有することで、ここを1日平均500kmづつ移動しながらの採集では、捜すというよりは、たまたま出合う偶然を祈るしかないというのが実感であった。予想もしなかったところで *Parnassius phoebus* の多産地を発見したときの喜びはひとしおであったが、反面前述の *P. clodius* の如く、欲しかったのに目撃すらできなかった種も多かった。そこで今年は、先ずアメリカ鱗翅目学会に入会、会員名簿から旅行予定のカナダ、British Columbia (以下B.C.と略す)の会員5人を選んで、情報依頼の手紙を出してみた。すると、全員が返事を送ってくれ、特に J. Shepard 氏からはB.C.北部の、C. Guppy 氏からはB.C.南部の採集地について、採集案内並の詳しい情報を御教示頂いた。それによると、ウスバキチョウはB.C.ではピンクマウンテン、及び北西端の Atlim から記録があり、例年では6月中旬から出現、また昨年採れなかった *P. clodius* はB.C.の南部で、6月上、中旬に産するとの事であった。また今年は春が寒く雨の日が多かった為に、発生が遅れぎみだという。以上の情報をもとに、6月20日から約20日、シアトルでレンタカーを借り、B.C.を反時計回りにグルリと一周する計画を立てた。ちなみにB.C.の面積は日本の約2倍半。この旅行もハードなドライブの連続になるのは間違いなかった。

さて昨年に引き続いて、日本にはなじみの無い種名ばかり登場する採集記を書くことは気がひけるので、ここで共通種という観点から日本と北米産の

蝶の簡単な比較をしてみよう。先ず、若林・川副の原色日本蝶類図鑑をめくり、北米が分布域に含まれている種を選びだした。次にそれらの種を、「The Butterflies of North America」(J.A.Scott)で確認した。この本は1986年に発行され、メキシコ以北の北米大陸とハワイ産の679種を載せている。その結果、日本で迷蝶と考えられているオオカバマダラ、北米で迷蝶と考えられているメスアカムラサキ、北米大陸には産せずハワイのみから知られているアゲハチョウ、バナナセセリ、ウラナミシジミ等を除くと、15種のみが共通種として残った。列記するとキアゲハ、ウスバキチョウ、モンシロチョウ、エゾスジグロチョウ、ミヤマモンキチョウ、ベニシジミ、ルリシジミ、ツバメシジミ、カラフトルリシジミ、アサヒヒョウモン、エルタテハ、キベリタテハ、ヒメアカタテハ、ダイセツタカネヒカゲ、タカネキマダラセセリである。両図鑑で属名の一致しないものもあったが、明らかに同種を指すと思われるので無視した。また、若林・川副によれば、アオタテハモドキ、タカネヒカゲも北米に分布することになっていたが、それに対応すると思われる種は Scott の方では見出せなかった。300種弱の日本産蝶、700種弱の北米産蝶の間で、共通種がわずかに15種というのは少ないと言っても良いであろう。また、共通種を見てすぐに気がつくことは、日本でいわゆる高山蝶と呼ばれる種が多いことで、それも本州産はミヤマモンキとタカネキマダラの2種のみで、北海道産の高山蝶がウスバキ、カラフトルリ、アサヒヒョウモン、ダイセツタカネと4種も含まれている。一般に北米産の蝶で旧大陸と共通の属に含まれるものは、ベーリング海峡が陸続きだった時にユーラシアから侵入し、その後北米大陸で文化をとげたと考えられている様で、繁栄しているものが多い。Scott によれば、ミヤマモンキの *Colias* 属は14種、カラフトルリの *Plebejus* 属は11種、アサヒヒョウモンの *Boloria* 属は14種、ダイセツタカネヒカゲの *Oeneis* 属は10種、また、日本との共通種は存在しないものの、ベニヒカゲの *Erebia* 属は12種が分布することになっている。B.C.は、日本との共通種6種を含むこれらの大半の種を産し、北海道で高山蝶とされる種を合法的に採集したい人、または日本産との近縁種に興味を持つ人にとっては、非常に興味ある採集地となっている。何よりも広大な自然の中で、伸び伸びと採集できそうなのが良い。さあ、ウスバキはじめ北方系の蝶をごっそり採集するぞ〜と、1988年6月21日、欲深い夢をのせた飛行機はセント・ルイスを飛び立ったのであった。

医王山産 オサムシ 採集難易度	
Bランク(珍)	クロカタビロオサムシ、ヤコンオサムシ
Cランク(少)	アオカタビロオサムシ、エゾカタビロオサムシ アキタクロナガオサムシ、オオオサムシ
Dランク(普)	クロナガオサムシ、マヤサンオサムシ マイマイカブリ

## ホソヒメクロオサムシ、石川県金沢市、富山県西砺波郡に産す

中西重雄・野中 勝

ホソヒメクロオサムシ、*Lptocarabus harmandi* (Lapouge)は本州の中部以東の山地に分布し<sup>1)</sup>、北陸3県からはこれまでに富山県下新川郡<sup>2)</sup>、石川県石川郡の尾口、白峰両村<sup>3)</sup>、福井県勝山市<sup>4)</sup>及び今立郡池田町<sup>5)</sup>から記録されている。本種を石川県金沢市と富山県西砺波郡の境界に当る赤摩木古山山頂付近、及び西砺波郡ブナオ峠付近で採集したので報告する。調査はバイトトラップにより、1988年9月18日に設置、9月23日に回収した。調査地点、トラップ数及び結果を以下に記す。

1) 赤摩木古山山頂付近(石川県金沢市、富山県西砺波郡、標高1450m)

トラップ数 30個 7♂♂8♀♀

2) 赤摩木古山～ブナオ峠中間地点(富山県西砺波郡、標高1250m)

トラップ数 20個 1♂♂4♀♀

3) ブナオ峠(富山県西砺波郡、標高1000m)

トラップ数 20個 7♀♀

また、全ての地点でクロナガオサムシ、地点2)、3)でマヤサンオサムシも同時に得られたことを付記しておく。

北陸地方の本種の分布は、ほとんど未調査の状態とってよく、特に北アルプスと白山山系の間に連続して分布しているかどうかを明らかにする為の富山県中部の調査が望まれる。また、白山の個体をもとに亜種 *mizunumai* が記載されており<sup>6)</sup>、今後、北陸各地の個体の形態の比較検討にも興味をもたれるところである。

## 文 献

<sup>1)</sup>石川良輔(1985) 原色日本甲虫図鑑(II)、保育社 14～54

<sup>2)</sup>水野透(1973) AMICA 17(1) 1～11

<sup>3)</sup>野中勝・中西重雄・澤田博(1988) 翔 72 1～27

<sup>4)</sup>長田勝(1979) 福井市立郷土自然科学博物館同好会会報 26 41～45

<sup>5)</sup>長田勝(1983) 福井市立郷土自然科学博物館研究報告 30 85～88

<sup>6)</sup>Ishikawa, R. (1972) Bull. Nat. Sci. Mus. Tokyo 15(1) 19～27

## 医王山産 カトカラ 採集難易度

Aランク(極珍)	ムラサキシタバ
Bランク(珍)	ゴマシオキシタバ、ジョナスキシタバ
Cランク(少)	シロシタバ、エゾシロシタバ、 アサマキシタバ、コガタキシタバ
Dランク(普)	オニベニシタバ、コシロシタバ、 マメキシタバ、キシタバ



## 富山県西砺波郡ブナオ峠付近の甲虫数種の記録

野 中 勝

ブナオ峠付近は標高約 1000m、発育良好なブナ林に囲まれた、なかなか感じの良い峠である。しかし、途中の道が悪かったこと(現在、工事が進んでおり、間もなく峠まで完全舗装されると思われる)、及び富山県に属する事から、金沢の虫屋の間での人気はイマイチで、記録が報告されたものはほとんどない。

そこで以下に甲虫数種について記録しておきたい。いずれもブナオ峠から大門山への登山道で得たものである。

1. ヒメオオクワガタ 1♂1♀ 1988年9月23日  
雄はナナカマドの枝上、雌は道路上で得た。
2. ピックニセハムシハナカミキリ 2♂♂ 1983年6月26日
3. アカイロニセハムシハナカミキリ 2♂♂1♀ 1983年6月26日  
この2種はサワフタギ花上より得た。
4. オオホソコバネカミキリ 1♂ 1983年6月26日  
ブナ立枯上で得た。
5. カツラカミキリ 1ex 1983年6月26日
6. クロニセリンゴカミキリ 9exs 1983年6月26日  
共にシナノキの葉を後食中のものを得た。

## オニヤンマがにくい

松 井 正 人

## モンキアゲハの巻

車を運転中、直前に何やら黒いものがストーンと落ちてきた。あわてて急ブレーキ。車の中はひっくりかえってメチャメチャ、同僚からは怒鳴られる。車を降りると、黒いものが不自然に飛び上がった。犯人はオニヤンマで、せっかくの獲物を落したらしく、あわてて拾っていった。モンキアゲハをぶらさげ、何事も無かったかのようにスイスイと。

## スズメバチの巻

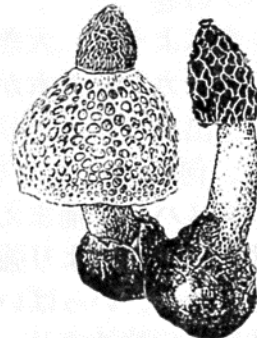
弁当を食べようと、大きなカエデの根元に腰を降ろした。ブンブン音のする方を見ると、カエデの木が大きく二又になっている辺りに、スズメバチが数匹止まって、出たり入ったりしている。『巣があるな』と思いながら弁当を食べっていると、何処からともなく現れたオニヤンマ1匹、スイーと飛んできて、1匹のスズメバチを捕まえたかと思うと、またスイーと飛んでいった。『オニヤンマはスズメバチより強いのかなあ』とのんびり考えていると、急に巣の方が騒がしくなり、いっぱい飛び出してきた。弁当をひっくりかえして逃げたものの、結果は病院泊まり。オニヤンマは何処かで、知らん顔をしていることだろう。

## SUN SUN 午 後

母が「コケを食べますか？」と聞くと「えっ！コケって食べられるの？」と聞きかえされた。相手は東京の人。コケを食べると聞いて驚いたらしい。とは言うものの母も私も初めのうちは『コケ採り』と聞いて、てっきりあの青々としたコケの事かと思っていた。北陸ではなぜキノコの事をコケと言うのだろうか…。それはさておき、そんな母と私もいつの間にかすっかり『コケ採り』のとりこになってしまった。山菜採りの好きな母だがキノコの季節は特別らしく今年も、転んで痛めた足など何のその、盛んに山へ向かっていた。

この辺でよく食べられているキノコとしては、松林に生えるものでシバタケ、イグチ、ハツタケ、ある種のヌメリタケなど、雑木林のものではウラベニホテイシメジ、サクラシメジ、ヌメリタケ類、クリフウセンタケ等が上げられるが、いずれにしても近頃では生える場所も数も減ってしまったようで、最もポピュラーなはずのシバタケでさえいぶん珍重されるようになった。また、キノコは年間の気象状況によって生え始める時期、期間、量などに毎年かなりの差があり、ちょうど良い採集時期をつかむのはなかなか難しいようである。人の噂を聞いて行った頃にはもう採りつくされた後、と言うのがしばしばで忙しい母にとっては多量に採ってくるのは至難の業なのである。しかし今年は偶然よい時期に当たったのか、なかなかの収穫で、シバタケを塩づけや冷凍にできたと喜んでいる。これらのキノコの時期が終わると、かなり遅くまで生え続けるシモオコシを目指して加賀方面へ走る。このキノコは年によっては12月に入っても採れることがあるので、今年もまだ松の木の下から愛らしい黄色の頭をのぞかせているかもしれない。

母は目下のところ、このように食べられるキノコだけを採るのを趣味としているが、私は一風変わったキノコを採るのが好きで、食べられようが食べられまいが変わったキノコがあれば目をとめる。キノコを食べ物としてではなく生物としてとらえると、その世界はたちまち神秘のベールに包まれてしまう。そのベールの中は暗く地味ではあるが、一歩足を踏み入るとそのひそやかな生命に隠された不思議な魅力に、驚きと感動でいっぱいになる。そして、そんなキノコたちの中に素晴らしい香りとうま味をもつものがあることが、かえって不幸に思えてくる。彼らが人間に出会うと美しい神秘のベールは無残にはぎ取られてしまう。中にはベールかわりにラップをかぶせられ店先に並べられるものもある。そんな姿を見ると哀れに思えてならない。私が食べ物としてのキノコを採るのが余り好きでないのはその為である。



ヒ ロ コ

## 会員の動き。しゃばの動き

☛10月2日2人のN氏、ホソヒメを求めて順尾山へ。オサトラをセット後、採卵に手を出すと、メスアカがごっそり採れた。今年のゼフは豊卵かな？

☛井村氏、家族総出でのんびり宝立山へ。コブでも叩いてくるのかと思いきや、道に迷って目的地に着けず。それでもしっかりとキノコを採ってきた。

☛10月4日中西、井村の自由業組。秋晴れにフラフラと誘いだされる。中西氏は、順尾山のオサトラの見回り。井村氏は宝立山へコブトラの設置。自由業はいいなあ！！

☛最近にわかにキノコづいてきたヒロコさん、その内『生える』なんて会誌を出すと言い出しそうだ。

☛最近にわかにサルメンづいてきた田中氏、中西氏に負けじと、白山市瀬辺りをうろついている。

☛最近にわかにクマガイソウづいてきた井村氏、毎週能登へ足を運んでいるが、今のところ見つかっていない。

☛最近にわかに遠視づいてきた嗟峨井氏、どうも採卵は放棄したらしい。

☛10月22日松井氏、足摺岬でサツマをネット・イン。出張先から抜け出しレンタカーで乗り付けたらしい。

☛福井の「だんだら」が復活している。三ノ峰のギンボシや蛇谷のヒメシジミ(1988)、嶺北のヒサマツ等々本県にとっても、その内容は熱い。88年10月の発行で、福井むしの会はほぼ10年ぶりに越冬から覚めた。

☛10月23日井村氏、宝立山でマヤサンをガッポリ採集。北斜面にセットした、オオカメトラップにきていたらしい。

☛野中氏、採卵に狂う。中西氏からつれなくされながらも、2年間溜りに溜った欲求不満から、一人静かに採卵にはげみ、その数、なんと数百卵。まだ10月なのよ！！

☛10月30日採卵会は雨で延期。あきらめきれないのが野中氏で、単独、雪の医王山へ。みぞれが降りしきる中、ウラクロ、イボタ、メスアカ等を採ってきた。

☛石川県が医王山のガイドブックを発行。B6版のハンドブックで、これを片手に医王山へ登れば、もう医王山通間違いなし。採集活動にも多いに参考になる。昆虫の項を松井氏が書いているから、頼めばもらえるかもしれないよ。

☛11月2日松井氏、9月15日から飼育のアサギマダラがいなくなった。飼育記録の更新中だっただけに、ひっそりに探していると、3歳の息子が「チョウチョお外よ、にがしてあげたよ」と一言。

☛11月3日採卵会。朝からの冷たい雨のせいか、参加はたったの2人。野中氏とのせられ屋の松井氏だったが、成果はパッとせず。午後より日和って、嗟峨井、指田宅をはしご。

☛雑木林で有名な嗟峨井邸の庭では、毎年ゴマダラチョウが越冬している。「おかげで落葉掃除しなくてすむんですよ」と奥さんが笑っていた。

☛11月4日深夜、秋田へ向かう車1台。3泊4日のキタカブリツアーのメンバーは中西、井村、野中。

☛秋田へ向かったマイマイグループ。キタカブリもそこそこにラン探し。サルメン、ナツエビネ等を得る。

例会の記録

10月7日城南管工2Fにて開催。10月例会は恒例の映写会。松田氏自慢のビデオ(八重山の蝶)に始まり、野中氏のスライド(カナディアン・ロッキー、ウスバキの夢)、松井氏のスライド(釈迦岳のキベリタテハ)と続きました。竹谷氏は都合で出席できませんでした。みせびらかし標本は、野中氏のアメリカ採集品、「北

極圏の蝶」でした。

雑談では、ラングループが完全に分離し、片隅で何やら話していた。主流は、内灘でジャコウアゲハを見た(田辺)、ヨハネスブルグに3年住んでいた(久慈)、ヒメウスバはまだ採ったことがない(指田)、今年はメスアカが豊産(野中)、今年はキベリが豊産(松井)、やっぱり八重山はパラダイス(松田)、眼科は以外と急がしい(山岸)、採卵にはぜひお誘いを(澤田)でした。

参加は、嗟峨井、中西、近藤、細沼、野中、澤田、指田、松井、松田、田辺、山岸、井村、勝海、久慈(新入会員)の14人。

目次

指田 春喜：噴泉塔(白山麓・岩間温泉)でヒメシジミ6頭を目撃確認	1
勝海 雅夫：蛇谷でヒメシジミの幼虫を採集	1
松井 正人：赤兎山でゴマシジミを採集	2
野中 勝：白山市の瀬のシモツケにホシミスジが発生	3
勝海 雅夫：新穂高《左俣谷のオオゴマシジミ》	3
吉岡 泉：タテハモドキ雑記	4
野中 勝：カナディアン・ロッキー その1	5
蛸鱈・野中 勝：ホトメクロオサムシ、石川県金沢市、富山県西砺波郡に産す	7
野中 勝：富山県西砺波郡ブナオ峠付近の甲虫数種の記録	8
松井 正人：オニヤンマがにくい	8
ヒロコ：SUN SUN 午後	9
編集部：会員の動き・しゃぼの動き	10
編集部：例会の記録	11

とぶ NO.74

1988年12月2日発行

〒920-01 金沢市大場町東871-15 松井方  
百万石蝶談会  
☎ 0762-58-2727  
振替 金沢5-562

印刷 小西紙店印刷所